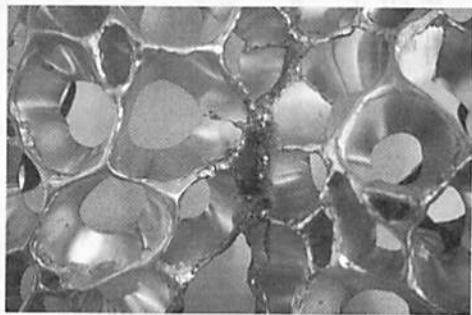


ある芸術家の主張。



「生きていく術を身につけた芸術家たちが
もっと広く社会とコミュニケーションできる作品を
創作しなければならない
そして“自分は”という主語ではなくて
“自然は”とか“他人は”を主語とする文脈で
自己の創作活動を語らなければならないと思います」。





陶芸作家・服飾デザイナー

TOSHIO MATSUI

松井利夫

“すでに存在する知られざるもの”
それが、創作活動をつづける上で重要なテーマだとう。
「主目的に物事を定義つけるのでなく、無目的に為されたものがすでに存在するものによって定義づけられた時に(はじめて)主張しはじめる」のだと、松井氏は語る。なにやらムツカシイ話だ。

で、つくりあげた当人にもそれが何のカタチを表すものか、説明することは困難だったとう。
やがて作業がおわると、氏はおもむろに分厚い地図帳を取出した。世界中に存在する地形から、なんとそのリングの集合体とソックリな地形を見つけたというのである。

口?と呼ばれるらしいことも突き止めた。ただ、残念なことに島の詳細については未だに不明である。
「この島の全貌があきらかになったとき、作品も完成をみるのです」と重々しく頷く氏。どこまでマジメな話なのか、ちよつと不思議な気分にもなりそうだったが、

とその表情は真摯なものであった。
松井氏は、今の近代芸術に疑問を投げかけるひとりである。日常生活の延長線上に芸術や美術を位置付けることの必要性はすでに様々な論議もされてきたが、氏自身もう一度それに挑戦、時には社会に対して何らかの挑発を行ないたいとしている。

では、もう少し具体的に。
以前、氏はアルミ材を利用してリングの集合体を創作したことがあった。それはまったく感覚的に造形されたもの

だった。その作業にどれほどの苦心があったのか知る者は誰もいない。だが、ついにボルネオ島付近、ハルマヘラ島に同じカタチを発見することができた。その島が現地語でジャイロロジロ

「相似形の対象に地形を選んだのは、それが自分で見ることができないもののひとつだから。日頃、当然だと思っているものの中には、具体的に認識できないものが多数ある」

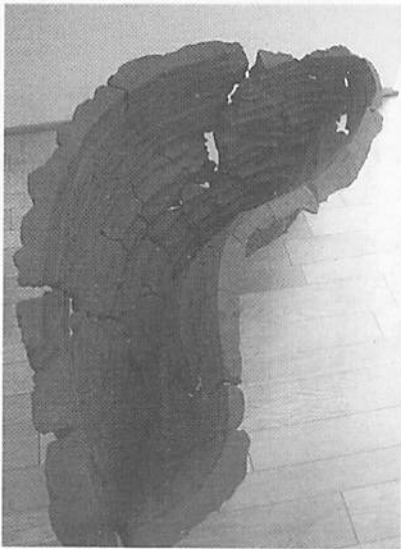
もちろん、ひとりで行なえることではない。その目標を具体化するひとつの手段として、最近あるイヴェントに参加する機会を得たという。国際交流バ

サージュ・フェスティバル94と題されたその催しでは芸術文化に関わる人材各地域・東京周辺・海外の育成や内外の若手芸術家による国際的共同作業、総合芸術としての新しい芸術・科学作品の開発、「身体開発」による新しいタイプの都市開発、以上四つの課題について試行実験が行なわれる。同時に新しい時代における芸術の役割を展望、芸術文化の新たな環境づくりと海外や国内の人材が集会的に登場できる仕掛けづくりをすすめるよとの構想をもつ。

このイヴェントが開催されます。京都では八月十九日から二十一日まで清水寺・成就院で、二十五日から二十八日まででは京都芸術短期大学でそれぞれ開催の予定です。興味のある方は、ぜひ見にきてほしい」とのことである。

「特権ではない美術、特権化されない美。これはもう、ウンザリするほど繰り返された言葉です。しかし、未だにそれが課題として生きているのも事実。芸術を語るのに啓蒙は不要。そういう意味では、現在の芸術は意味を持ちすぎた。生きていく術を身につけた」芸術家たちが、もっと広く社会とコミュニ

「ファッションとは移動するアートである、ということ」を近ごろ改めて意識しています。これは、私が従来つづけてきた創作活動では覚えることのなかった、新鮮な感覚です」と語った後で、「服飾に対する美意識、オート性というものも、当然のように存在するが具体的に認識できないもの」のひとつではないか。最後には、いささか混乱気味の筆者のためにちゃんとオチまでつけていた。



「国内・海外を問わずいろんな所で

ニケーションでできる作品を創作しなければならぬ。そして「自分は」という主語ではなくて、「自然は」とか「他人は」を主語とする文脈で自己の創作活動を語らなければならぬと思います」
他者から動かされる自分、他者に利用される自分を常に意識しながら創作活動を突き詰めてゆく。そうすれば、人々と共有化できる「人間のオリジナル」のようなものが、自然と作品の中に生まれてくるはずだとう。

陶芸家として活動、現在は創作活動の方向をアルミ素材を使ったオブジェに変えつつある氏は、京都芸術短期大学・服飾研究室の講師として教壇に立つ身でもある。

文 三村 溪
写真 大田 メグミ